

保険会社に勤める和也の隣には、華奢で可憐な彼女が笑う。

平井彩花は27歳。

色白で童顔、笑うと頬にぼこつとエクボが浮かぶ。

着痩せするタイプだけど、胸や太ももはむっちり肉付きがよく、鏡の前でその体を見ると服装によつては、

「これはちよつとやらしいかも」と自分で思うほどだった。

性格はサバサバしていて、気も強く、  
気さくに冗談も軽く返せるタイプ。

そんな彩花には三年付き合っている彼氏、和也がいる。

真面目で少し鈍感、でも優しい男だ。

今日は和也の会社の内輪飲みにも、彩花も誘われて参加していた。

その中でも、和也の部署の後輩二人が特に目立っていた。

一人目は蓮斗。

人懐っこい笑顔が印象的な、雰囲気イケメン。  
コミュ力が高く、誰とでもすぐに打ち解ける。

今日も彩花の隣に自然と座り、

「彩花ちゃん、今日も可愛いっすね。和也先輩、ほんと羨ましいですよ」と明るく言ってくる。

年上の彩花にも平気でちゃん呼びするのが蓮斗らしさでもある。

彩花は笑って、

「はいはい、おだててもお酒おかわり出さないからね」と軽く返した。

蓮斗は「えー、ケチ！」と笑いながら肩を寄せてくる。

距離が近い。

でも、飲み会のノリだと思って、彩花は気にしなかった。

もう一人は怜。

王道の整った顔立ちで、背が高い。

目つきに少し鋭さがあり、言葉数は少ない。

視線が合うと、彩花はなぜか背筋がぞくりとする。

怜はほとんど喋らず、ただ静かにグラスを傾け、時折彩花の方を見ていた。その視線が、彩花の仕草や表情を、じつと観察しているように感じた。

飲み会が終わると、二次会は和也の狭い１LDKマンションへ。

和也は早々に酔いつぶれ、

ベッドで大の字になって寝息を立て始めた。

部屋に残ったのは彩花、蓮斗、怜の三人だけ。

「彩花ちゃん、もう帰ります？」

蓮斗がニコニコしながら尋ねる。

でもその目は、どこか遊び心に満ちていて、彩花の反応を待っているようだった。

「うーん。もうちょつと飲もうよ。」

和也も寝ちやったし、静かにすればいいでしょ」

彩花はサバサバとそう言って、缶ビールをもう一本開けた。

怜は無言で立ち上がり、カーテンをゆっくり閉める。

部屋の照明が柔らかくなり、空気が少し重くなった。

蓮斗が彩花の隣に座り直し、肩を軽くぶつけてくる。

「彩花ちゃんって、ほんとに可愛いのに言うこと鋭くて面白いですよね。

でも、笑うときのエクボ……

なんか、守りたくなるっていうか」

言葉は軽い。

でも、声のトーンがさつきより少し低くなっている。

彩花は「またそれ？ どうせ他の女の子にも同じこと言ってるんですよ」と笑って誤魔化した。

でも、心のどこかで、

蓮斗の視線が自分の唇や首筋をなぞっている気がした。

怜が反対側に腰を下ろす。

…これも近い。

無言で、彩花の太ももに視線を落とす。

スカートの裾から覗く、ムチつとした白い肌。

怜の指が、そつと、スカートの端を摘まむように動いた。

触れていない。ただ、近くにあるだけ。

彩花は一瞬、体を固くした。

……これ、わざと？

「怜くん、スカート踏んでるよ」

彩花は冗談めかして牽制した。

怜は視線を上げ、静かに言う。

「あ、すみません」

その短い言葉に、なぜか彩花の胸がどきりと鳴った。

緊張している彩花に気づいて、蓮斗が彩花の耳元に顔を寄せて、囁く。

「彩花ちゃん……和也先輩寝ちゃってるし

……ちよつとだけ、遊ばない？」

息が耳にかかる。

彩花は笑って「バカ言わないの」と肩を押した。でも、押した手が、蓮斗の胸に触れてしまう。

固い。

蓮斗は動じず、逆に彩花の手を軽く握り返した。

「冗談ですよ」。

……でも、本気だったらどうします？」

目が笑っていない。

彩花は「本気だったら、和也に怒られるよ」と返したけど、声が少し上ずっていた。

怜の手が、今度は彩花の膝に、そつと置かれた。  
温かさが伝わる。

動かない。ただ、そこにある。

彩花は視線を怜に移す。

怜は無表情に近い顔で、ただ見つめ返してくる。

「……声、出さないで」

その一言で、部屋の空気が一変した。

蓮斗が彩花の腰を抱き寄せる。

「和也先輩、起きないようにね。

俺たち、ほんの少しだけ…

…彩花ちゃんの反応、見てみたいんです」  
言葉は甘い。

でも、意図がはつきりしている。

彩花は首を振った。

「だめだって……本気で言ってるの？」

本気にしていない口調で返すけど、

彩花の心臓が早鐘のように鳴っている。

怜の指が、膝からゆっくり太もへ這い上がる。

触れるか触れないかの距離で、布をなぞるように。

彩花の体が、ビクツと反応する。

蓮斗がクスクスと笑う。

「ほら、もう体が正直。」

彩花ちゃん、こんな状況でドキドキしてるんですよ？

和也先輩の隣なのに」

怜が彩花のシャツの裾に指をかける。

ゆっくり、めくり上げる。



ブラジャーのレースが覗く。

「あ…怜くん何してるの…？」

無言で進める怜に彩花は驚きよりも困惑する。

怜の指が、布の縁をなぞる。

乳首の位置を探るように、軽く押す。

彩花の体が震えた。

「……っ」

小さな声が漏れる。

蓮斗が彩花の顎を優しく掴み、  
顔を自分の方に向けて近づける。

「我慢して。」

声出したら、和也先輩に……

『彩花が俺たちに触られてる』ってバレちゃうかもよ？！』

蓮斗に気を取られている間に怜がブラのカップをずらす。

ぶるんと乳房がこぼれ、乳首が空気に触れる。

「待って……ダメだつて…」

すでにピンクの乳首が硬くなっている。

怜の指が、乳首の先をコリコリと転がし始めた。

ゆっくり、確実に、執拗に。

彩花は体を震わせながら、唇を噛む。

目を瞑って、必死に声を抑える。

蓮斗が耳元で囁く。

「可愛い。」

こんなに硬くして……和也先輩には見せられない反応だね」

怜の手がスカートの中に滑り込む。

ストッキング越しに、パンティのクロッチをなぞる。

湿り気がすでに伝わっている。

怜が小さく息を吐く。

「……濡れてる」

怜の声が甘く響く。

「彩花ちゃん、和也先輩の隣で、  
後輩にこんなに感じちやって……

興奮してるんだ？」

怜の指がストッキングをずらし、直接クリトリスに触れる。  
親指で優しく撫で回すように。

中指で入り口をなぞりながら、円を描く。

彩花の体がビクビクと震え、腰が浮く。

和也の寝息が、すぐ横で聞こえる。

この背徳感が、彩花をさらに熱くさせる。

蓮斗が彩花の耳に息を吹きかける。

「彩花ちゃん……まだイカせないよ？  
朝まで、こーやって……焦らしてあげる」

怜がクリを軽く弾く。

電気が走ったように、体が跳ねる。

「……まだ、始まったばかりですよ、彩花さん」

怜の低い声が、静かな部屋に響いた。

彩花の体は、火照りを抑えきれなかった。

和也の寝息がすぐ隣で規則的に響くベッドの上で、  
蓮斗と怜の手に囲まれている。

シャツは乱暴にめくり上げられ、ブラはずらされて、  
色白の乳房が無防備に曝け出されていた。

スカートの中では、怜の手がストッキングを無理やり引き下げ、  
直接肌に食い込むように触れていた。

クリトリスを優しく、しかし容赦なく擦る指の動きに、彩花は必死に唇を噛み、声を殺していた。

「ん……っ、くう……」

小さな息が漏れるたび、蓮斗が耳元で意地悪く囁く。

「彩花ちゃん、声出ちやいそう？」

和也先輩、ほんとにすぐ隣ですよ。

俺たち後輩に、こんなエロいことされてるってバレたら

……どうなると思います？

和也先輩、きつとシヨックで泣いちゃうかもね。

それとも、彩花ちゃんが『後輩二人に犯されてる』って正直に白状する？」

その言葉が、彩花の心を鋭く刺す。

気の強い性格の彩花は、

普段なら「ふざけんな」と一喝するはずだ。

でも今は、快楽で体が言うことを聞かない。

彼氏の隣で、後輩二人に体を弄ばれているという背徳感が、恐怖と興奮を混ぜて彩花を蝕む。

怜の指がクリを円を描くように擦り続け、時折強く弾く。

電流のような快感が下腹部を駆け巡り、彩花の腰が無意識に浮いてしまう。

一方、蓮斗の手は乳首を委ねられ、コリコリと摘みながら転がされる。

硬く尖った先を、指の腹で優しく、執拗に。

「こんなところで……後輩に、三人で……だめだって、ほんとに……」

彩花の心の中で、罪悪感が渦巻く。

和也の温もりが感じられるほど近いのに、

彩花の体は別の男たちに反応している。

この状況が、彩花をさらに熱くさせる。

怜が、低い声で命令する。

「……動かないで。もつと見せて」

その言葉に、彩花は抵抗しようとした。

でも、蓮斗が彩花の肩を強く押さえ、怜が太ももを掴んで広げる。

二人の力に抗えず、

彩花の体は床の上で無理やりM字開脚の格好にさせられる。

スカートが完全に捲れ上がり、

パンティがずらされて、下半身が丸見え。

色白の太ももが震え、

むっちりとした秘部が暗闇の中で露わになる。

「や……だ、こんな格好……恥ずかしい……見ないで……」

彩花は声を抑えて訴えるが、蓮斗がクスクス笑う。

「恥ずかしい？」

でも彩花ちゃん、こーんなに濡れてるじゃないですか。

和也先輩の隣で、後輩二人に無理やり足広げられて……興奮してるんでしょ？  
ほら、もっと開いて。俺たちに全部見せてよ」

怜の目が、彩花の秘部をじつと観察する。

Sっ気の強い視線に、彩花の体がビクツと反応する。

怜の指が、再びクリに触れ、ゆつくりと擦り始める。

今度は中指を入り口に浅く挿入し、かき回すように。

グポツグチュツグチュ

掻き回すたびに下品な音が響き渡る。

蓮斗は彩花の乳首を摘まみ、軽く引つ張る。

「彩花ちゃんのエクボ、エロい顔のときも可愛いな。」



和也先輩には、こんな恥ずかしい格好見せたことないよね？  
俺たちだけだよ、こんな彩花ちゃん知ってるの」

背徳感が彩花を襲う。

彼氏の寝顔が視界の端に見えるのに、  
後輩二人に体を弄ばれ、恥ずかしいポーズを強要されている。

「もう……やめて、和也が起きたら……本当に終わりだよ……」  
彩花の声は震え、涙目になる。

でも、体は正直だ。

怜の手が速さを変える。

ゆつくりから急に速く、クリを指で挟んで振動させるように。

下腹部に、何かが溜まっていく感覚。

初めての、強い圧迫感。

蓮斗が彩花の首筋に唇を這わせ、甘く囁む。

「彩花ちゃん、パンティびしょびしょ。

こんなM字で足開かされて、後輩の指で感じちゃってる……

和也先輩に申し訳ないと思わないの？

ふふ、でも止められないよね。

もつとエロい声、出したくてたまらないんでしょ？」

怜が乳首を強く摘まむ。

同時に、クリを親指で押し込み、中指を入り口にリズムカルに挿入。

ぐちゅぐちゅ、という水音が小さく響く。

彩花の体が弓なりに反る。

「ん……………ふう……」

声が漏れそうになるのを、手で口を押さえて耐える。

和也の体が少し動く気配がして、彩花の心臓が止まりそうになる。

……起きたら、どうしよう。

この格好で、後輩二人に囲まれてるのを見られたら……。

でも、和也はただ寝返りを打っただけだった。  
蓮斗が耳元で囁く。

「危ない危ない。

声我慢できて偉いよ、彩花ちゃん。

でも、次はもつと我慢が必要かもよ？

やめて欲しいならちゃんとお願ひしないと、  
止めてあげないから」

彩花は首を振るが、無理やりM字のまま固定されている。

怜の動きが加速する。

クリを弾き、入り口を指でかき回す。

さらに音の湿り気が増す。

彩花の内側が熱くうねり、溢れ出しそうな感覚が限界に。

「待って……なんか、出ちゃうよ……」

やだ、こんな格好で……恥ずかしい……」

蓮斗の目が輝く。

「出ちやうんだ？」

いいよ、俺たちに見せて。

和也先輩の隣で、後輩に潮吹かされて……最高」

怜が最後のひと押しをする。

クリを強く擦り、中指を浅く抜き差し。

彩花の体が限界を迎える。

声を殺して、ただ震える。

「んんんっ……!!」